

MJサテライト 古文

■本書の特色

- ① 公立高校（上位校）および私立中堅高校入試対策用に編集した、古文問題集です。
- ② 入試傾向に沿って単元を構成し、効率的な学習ができるように工夫しました。
- ③ 第1～3講座で、古文の基礎的な知識をまとめ、基本的な解法を身につけます。
- ④ 第4～7講座で、標準的な問題に取り組み、頻出パターンの問題に取り組みます。
- ⑤ 第8～10講座では、入試レベルの問題を掲載。実戦的な古文の力を養います。
- ⑥ 第11・12講座は総合問題です。自分の実力を試してみましよう。

□ もくじ □

〈古文の基礎〉	
第1講座	古文の知識（歴史的かなづかい・重要古語）……………2
第2講座	文語文法……………6
第3講座	古文の基礎知識・入試によく出る問題……………10
〈実戦編〉	
第4講座	物語①……………14
第5講座	説話①……………18
第6講座	随筆①……………22
第7講座	日記・韻文……………26
第8講座	物語②……………30
第9講座	説話②……………34
第10講座	随筆②……………38
第11講座	総合問題①……………42
第12講座	総合問題②……………46

第3講座 古文の基礎知識・入試によく出る問題

古文の基礎知識

① 季節・月名

古文に記される四季は陰暦（旧暦）によるため、現代の季節感とは異なっている。また、年月日や月名にも、古文に特有の表現が用いられている。

春	陸月（一月）	如月（二月）	弥生（三月）
夏	卯月（四月）	皐月（五月）	水無月（六月）
秋	文月（七月）	葉月（八月）	長月（九月）
冬	神無月（十月）	霜月（十一月）	師走（十二月）

・年月日にかかわる重要な古語

例 「ついたち」……月の第一日。または月の初めごろ。

「つごもり」……月の最終日。または月の終わりごろ。

「こそ」……去年。

「来し方行く末」……過去と未来。口語では「来し方」ともいう。

「またの年（日）」……翌年（翌日）。「またの」は「次の」の意。

「年ごろ・日ごろ」……数年来。数日来。「ごろ」が長い期間の経過を表す。

「ひねもす」……一日中。

「夜もすがら」……一晩中。

「中の・末の」……中旬の。下旬の。

② 方位・時刻

古文に記される時刻や方位には十二支が用いられる。十二支は、「子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥」の十二種の動物名である。

・方位と十二支

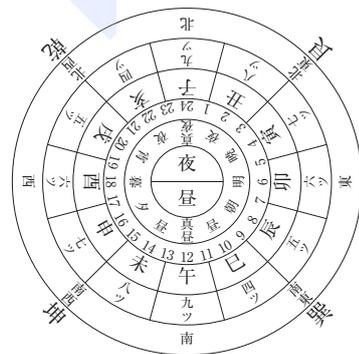
子を北として、時計の文字盤のように十二支を配置する。北東の方位は丑と寅の間になるので、「艮」の字をあてる。同様に、南東

↓巽、南西 ↓ 坤、北西 ↓ 乾。

・時刻と十二支

子を午前〇時として、二時間おきに十二支を配置し、二十四時間を十二に分割する。子の刻と午の刻を「九つ」とし、二時間おきに「八つ」から「四つ」までを定め、時刻とする。

例 ・一刻 ≡ 二時間 ・子の刻 ≡ 午後十一時～午前一時
・明け六つ ≡ 午前六時 ・暮れ六つ ≡ 午後六時



古時刻・古方位

1 次の文中の——線部を口語訳せよ。

(1) 葉月中の五日は仲秋の名月なり。 ()

(2) これはわが年ごろの妻なり。 ()

(3) 皐月つごもり、雨うち続く。 ()

(4) 来し方思ふは老の性ならむ。 ()

2 次の文中の——線部を口語訳せよ。

(1) 卯のかたの空白みそめぬ。 ()

(2) 申の刻ばかりにや、里に着きぬ。 ()

(3) 風激しく吹きて静かならざりし夜、戌の時ばかり、都の辰巳より火

いで来て、戌亥にいたる。

()

入試によく出る問題

① 主語の指摘

古文では、主語が省略されていることが多い。主語を明らかにするために、次の点に注意する。

- (1) 登場人物を把握し、その関係をおさえておく。その際、筆者(作者)も忘れないこと。
- (2) 古文では、新しい登場人物が現れるまで、前の登場人物を示す主語を省略することが多い。
- (3) 古文の一文は、現代文にくらべて長く、一つの文中で主語が入れることもある。
- (4) 格助詞「の」の主語を表す用法が手掛かりになる。
- (5) 同一人物が、同じ一文中で別の呼び方をされることもある。

② 会話文の指摘

古文では、会話文に「」をつけないのがふつうである。会話文を明らかにする手掛かりは次の三つである。

- (1) 「言はく」「言ひしには」「問へば」「のたまひけるは」などの語があれば、その下から会話文と考えてよい。
- (2) 会話文の終わりは、「と」「とて」などの助詞で示されることが多い。
- (3) 会話の部分には、「侍り」「候ふ」「かな」などの語や、禁止・命令の表現が用いられていることが多い。

③ 指示語の内容

古文に用いられる指示語の読解は、次の点をおさえておく。

- (1) 古文の指示語のうち、代名詞・連体詞の指示語(こ・そ・か・さる・かかる など)は、人・事物・場所などを指し、副詞の指示語(かく・しか)は、行動・状態などを指す。
- (2) 指示語の指示内容は、ほとんどの場合、指示語以前にある。
- (3) 必ず指示内容を指示語の位置にあてはめてみて、文意が通るかどうかを確認する。

1 次の文中の——線部「見つけて」の主語を、文中から抜き出して書け。

うつくしきもの。瓜にかきたるちこの顔。すずめの子の、ねず鳴きするにをどり来る。二つ三つばかりなるちこの、いそぎてはひ来る道に、いと小さき塵のありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。

*ねず鳴き＝ねずみの鳴き声をまねてチューチューいうこと。

*をかしげなる＝愛らしい。

()

2 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

予が母、某名人の弟子にて、将棋いとつよし。母のいひしには、つめぎはになりて案ずるは初心のうちなり。はじめのうちよりつめぎはを案じて指せと。囲碁を打つにも、いまだいたらぬ者は、見苦しき手を打つなり。定石に従ふを碁のすちとす。大かたは、打ちてあとに笑はるること多し。

*つめぎは＝勝負の最後の段階。

(1) ——線部「すち」を、現代かなづかいに直して書け。

()

(2) 文中で、母が言った言葉はどこからどこまでか。その初めと終わりの五字を抜き出して書け。

初め		終わり	
----	--	-----	--

3 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

又、鶏の子をあたたまる様は、誰も見る事ぞかし。毛のへだたりたるをあかず思ふにや、みづから胸の毛をくひ抜きて、膚につけて、ひねもすこれをあたたまむ。

(1) ——線①「ひねもす」を口語訳せよ。

()

(2) ——線②「これ」は何を指すか。文中から抜き出して書け。

()

確認テスト

1 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

ころは二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに、^①をりふし北風激しくて、磯打つ波も高かりけり。舟はゆり上げゆりすゑただよへば、^②扇もくしに定まらずひらめいたり。

問一 — 線①「酉の刻」の口語訳を書け。

問二 — 線②「をりふし」を現代かなづかいに直して書け。

問三 — 線③「ゆりすゑただよへば」を現代かなづかいに直して書け。

問四 — 線④「扇」の読みがなを歴史的かなづかいで書け。

2 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

陰陽師有宗入道、鎌倉よりのぼりて、^{*}尋ねまうで来りしが、まづさし入りて、この庭の^①いたづらにひろきこと、浅ましく、^{*}あるべからぬ事なり。道をしるものは植うることをつとむ。ほそ道ひとつ残して、皆畠につくり給へといさめ侍りき。^{*}誠に、少しの地をも^②いたづらにおかんことは、益なき事なり。くふ物、葉種を植ゑおくべき。^{*}陰陽師吉凶のうらないや地相などをみる人。^{*}〔徒然草〕より



* 尋ねまうで来りし (私を) 探してやってきた。

* さし入りて (門から) 入って。

* 浅ましく (驚きあきれたこと) で。 * いさめ侍りき (忠告) しました。

* 益なき事 (無益なこと)。 * 葉種 (葉の材料)。

問一 — ①、③「いたづらに」の共通する意味として最も適切なものを次から選べ。

- ア むだに
- イ 困るように
- ウ 気まぐれに
- エ たいへんに

問二 — 線②「あるべからぬ事なり」の口語訳として最も適切なものを次から選べ。

- ア めったにないことだ
- イ よくあることだ
- ウ よろしくないことだ
- エ よろしいことだ

問三 文章中で、有宗入道が言った言葉はどこからどこまでか。その初めと終わりの四字を抜き出して書け。

初め

終わり

3 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

ある男、つねに猿を射けり。ある日山を過ぐるに、大猿ありければ、木に追ひのぼせて射たりけるほどに、あやまたずかせぎに射てけり。^①すでに木より落ちむとしけるが、なにとやらん^②物を木のまたに置くやうにするをみれば、子猿なりけり。おのが傷を負ひてつちに落ちむとすれば、子猿を負ひたるをたすけむとて、木のまたにすゑむとしけるなり。

* 追ひのぼせて (追い上げて)。

* なにとやらん (いったいなんであろうか)。

問一——線①「すでに木より落ちむとしける」の口語訳として最も適切なものを次から選べ。

- ア ついに木から落ちてしまった
- イ すぐ木から落としてしまった
- ウ やがて木から落とそうとした
- エ まさに木から落ちようとした

問二——線②「物を木のまたに置くやうにする」は、主語が省略されている。その主語を次から選べ。

- ア 大猿
- イ ある男
- ウ 子猿
- エ 作者

4 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

あるところに、女房^{にようぼう}あまたゐて箏^{そう}ひくに、琴柱^{ことばしら}のはしり失^うせたるを、さるべき男もなければ、宿直人^{しゆくちくじん}の見ゆるを呼びて、この前裁^{ぜんさい}の中に、楓^{かえ}の木二^{ふた}俣^{たえ}にこれほど、しかじか切りて来^ことこまかに教^{おし}へてやりつ。「はかばかしきことあらじ」といふほどに、切りてもて来たり。簾^すのもとに寄りて、「このかり琴柱^{ことばしら}参^{まゐ}らせ候^{まう}はん」といひ出^いでたるに、思はずに^①あさましくて、「こまごまと教へつる、いかにをこがましく思ひつらん」と、恥^はぢあへりけり。
〔十訓抄〕より

* 女房 女官

* 箏 十三弦の琴

* 琴柱 琴の上に立てて、弦を支えるもの

* さるべき男 適当な人

* 宿直人 宮中や役所に宿泊して勤務・警戒する人

* はかばかしきこと 期待できること

* 参らせ候はん 申しあげましょう

問一 文章中に、会話記号の「」をつけるとわかりやすくなる箇所がある。その部分の初めと終わりの四字を抜き出して書け。

初め 終わり

問二——線①「いひ出でたるに」の主語を次から選べ。

- ア 女房
- イ さるべき男
- ウ 筆者
- エ 宿直人

問三——線②「あさましくて」の口語訳として最も適切なものを次から選べ。

- ア みつともなくて
- イ 怒りをあらわにして
- ウ 驚きあきれて
- エ 気の毒になつて

5 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

「何にかあらん。」と器^{うつは}のふたを取りて見れば、黄の粉まぶしたる餅^{もち}なり。主人喜び、今日なんものさびしくてありけるに、餅得^{もちえ}し^①よき幸ひなれ。さらば人々にまゐらせまじとて、やがて箸^{はし}取り出でて、取らんとしけるに、いと固^{かた}かりければ、「^②こは日を経^へしものとおぼゆ。あぶりてこそものせめ。」

問一 文章中に、会話記号の「」をつけるとわかりやすくなる箇所がある。その部分の初めと終わりの四字を抜き出して書け。

初め 終わり

問二 ①に入る助詞を文章中から抜き出して書け。

〔 〕

問三——線②「こ」は何を指すか。文章中から九字で抜き出して書け。

〔 〕

第4講座 物語①

物語

① 物語とは

物語とは、作者が、ある人物や事柄などについて、他人に語る形をとって記述された散文。

② 物語の読み方

物語を読む時には、そのストーリーをとらえながら、そこにおける登場人物の心情に注意する。また、室町時代以降の物語や小説では、その中に教訓的内容が含まれていることもあるので注意する。

③ 物語の分類

作り物語…架空の出来事が、作者の想像によって書かれた物語。

例「竹取物語」

歌物語…物語の話と話の間に、適宜、和歌が挿入され、散文と和歌があいまって内容を構成するもの。例「伊勢物語」

軍記物語…主に源平の合戦など、戦の中での人間の行動と心情が著された物語。例「平家物語」

文学史のまとめ

おもな物語・小説

作品	作者	成立年代	備考
竹取物語	未詳	平安時代	「物語の祖」といわれる
伊勢物語	未詳	平安時代	最初の歌物語
源氏物語	紫式部	平安時代	それまでの文学の集大成
平家物語	未詳	鎌倉時代	軍記物。琵琶法師が語り広めた
伊曾保物語	未詳	江戸時代	仮名草子。「イソツブ物語」の訳書
日本永代蔵	井原西鶴	江戸時代	浮世草子。商人の盛衰を描く
東海道中膝栗毛	十返舎一九	江戸時代	滑稽本。江戸・大阪間の道中記
南総里見八犬伝	滝沢馬琴	江戸時代	読本。「勸善懲悪」を貫く長編小説

1 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

田真、田広、田慶、この三人は兄弟なり。親に後れてのち、親の財宝を三つに分けて取れるが、庭前に紫荊樹とて、枝葉榮え、花も咲き乱れたる木一本あり。これをも三つに分けて取るべしとて、夜もすがら三人僉議しけるが、夜のすでに明けければ、木を切らんとて、木のもとへ到りければ、昨日まで榮えたる木が、枯れたり。田真これを見て草木心ありて切り分たんと言へるを聞いて枯れたり。まことに人としてこれをわきまへざるべしやとて、分たずして置きたればまた再びものごとく榮えたるとなり。

*僉議 Ⅱ 相談。

(「御伽草子」より)

問一 線①「夜もすがら」の意味を書け。

問二 〇にあてはまる言葉として、最も適切なものを次から選べ。

- ア さらでも イ にはかに
ウ いささか エ さすがに

問三 線②「とて」は、会話を引用したことを示す助詞である。その会話文の冒頭の二字を抜き出して書け。

問四 この文章の内容と一致するものを、次から選べ。

- ア 親が年を取ったので、兄弟は財宝と木を分けようと話し合った。
イ 草木にも心があるが、兄弟の気持ちを知ることができなかった。
ウ 兄弟は、木を分けようとしたが、枯れて価値がないのでやめた。
エ 兄弟は、木を分けるのは心ないことだと考え、切るのをやめた。

3 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

ある時、夜更けて樋口屋の門をたたきて、酢を買ひにくる人あり。中戸を奥へは幽かに聞こえける。下男目を覚まし、「何程がの」と云ふ。「むつかしながら一文がの」と云ふ。空寝入りして、そののち返事もせねば、ぜひなく帰りぬ。夜明けて亭主は、かの男よび付けて、何の用もなきに「門口三尺ほれ」と云ふ。御意に任せ久三郎、諸肌ぬぎて鋏を取り、堅地に気をつくし、身汗水なして、やうやう掘りける。その深さ三尺といふ時、 Aがあるはづ、いまだ出ぬか」と云ふ。「小石・貝殻より外に何も見えませぬ」と申す。「それ程にしても銭が一文ない事、よく心得て、 B」

(井原西鶴「日本永代蔵」より)

*中戸〓店と居間を仕切る戸。

*何程がの〓どれほどですか。

*文〓通貨の単位。

*尺〓長さの単位。一尺は約三〇・三センチメートル。

*御意に任せ〓ご命令に従って。

問一 線①「むつかしながら」の意味として最も適切なものを次から選べ。

- ア 苦しいでしょうが
- イ めずらしいでしょうが
- ウ こわいでしょうが
- エ ごめんどうでしょうが

問二 線②「何の用もなきに『門口三尺ほれ』とあるが、だれが、だれの、どういう行為に対してそうさせたのか。「酢」という言葉を用い、三十文字以内で書け。

問三 線③「やうやう」の意味として最も適切なものを次から選べ。

- ア いろいろ
- イ ゆっくり
- ウ ようやく
- エ かるがる

問四 A にあてはまる言葉として最も適切なものを、文章中から一字で抜き出して書け。

問五 B にあてはまる文として最も適切なものを次から選べ。

- ア かさねては酢の商も大事にすべし。
- イ かさねては一文商も大事にすべし。
- ウ かさねては夜更けの商も大事にすべし。
- エ かさねては夜明けの商も大事にすべし。

4 次の古文は、能楽で、小鼓を打つことを役目とする権九郎が、名人といわれた父親新九郎の芸域を目指して修行していた若き日の話である。この文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

権九郎といひし頃、日々鼓を出精しけれども、未だ心に落ちざる折から、年久しく仕へし老姥、朝々茶など持ち来たりて権九郎へ給仕しけるが、ある時申しけるは、主人の鼓もはなはだ上達のよし申しければ、権九郎もをしき事に思ひて、常に鼓は聞けど手馴れし事にもあらず、我が職分の上達を知る訳を尋ね笑ひければ、老姥答へて、「われ、親新九郎鼓を数年聞きけるに、朝々煎じける茶釜へ音ごとに響き聞こえはべる。これまで権九郎鼓はその事なきところ、この四、五日は鼓の音ごとに茶釜へ響きけるゆゑ、さてこそ上達を知りはべる。」と答へけるとなり。年久しく耳馴るれば、自然と微妙によし悪しも分かるものと、権九郎も感じけるとなり。

- * 出精しけれども〓精を出していたけれども。
- * 老姥〓年をとった女性。

(根岸鎮衛「耳囊」より)

問一——線①「心に落ちざる」の意味として最も適切なものを次から選べ。

ア あきらめきれない イ 興味がわかない

ウ 任せられない エ 満足できない

問二——線②「をかしき事」の意味として最も適切なものを次から選べ。

ア 風流なこと イ 感心なこと

ウ 奇妙なこと エ 愉快なこと

問三——線③「年久しく耳馴るれば」の主語はだれか。文章中から抜き出して書け。

[]

問四 権九郎の「職分の上達」を知った理由を、老姥はどのように述べているか。四十字以内の現代語で書け。

5 次の文章は、「平家物語」の一節で、一の谷の合戦で捕らえられた平

重衡しげひらが、鎌倉かまくらに送られていく途中、自分の境遇いきさつについて思いめぐらす場面である。これを読んで、あとの各問いに答えよ。

都を出でて、日数経れば、弥生やよひもなかば過ぎ、春もすでに暮れなんとす。遠山の花は残のこんの雪かと思えて、浦々うらうら島々霞かすみみわたり、来こし方行く末の事ども思ひつづけたまふに、「さればこれはいかなる宿業しゆくごふのうたてさぞ。」とのたまひて、^①ただつきせぬものは涙なり。

御子おんこの一人も^②おはせぬ事を、母の二位殿にみどのも嘆なげき、北きたの方大納言かただいながのすけ侍殿のも本意ほんいなきこと③にして、よろづの神仏かみぶつに祈り申されけれども、そのしるしなし^④。「かしようぞなかりける。子だにあらましかば、いかに心苦しからん。」と

^③のたまひけるこそ、せめての事なれ。

^④小夜こよの中山なかつまにかかりたまふにも、また越ゆべしともおぼえねば、いとどあはれの数かずそひて、杖たもとぞいたくぬれまさる。

*いかなる宿業しゆくごふのうたてさぞ〓どういいう前世ぜんせいの報うりいによるつらさなのだろうか。

*北きたの方大納言かただいながのすけ侍殿の奥方。

*本意ほんいなきこと〓残念なこと。

*かしようぞなかりける〓なくてよかった。

*小夜こよの中山〓現在の静岡県にあった坂道。

問一——線①「ただつきせぬものは涙なり」とは、「とめどなく涙が流れる」という意味であるが、これと同じような意味を比喩ひゆ的に表現している部分を、文章中から抜き出して書け。

[]

問二——線②「おはせぬ」を現代かなづかいに直して書け。

[]

問三——線③「のたまひける」とあるが、平重衡しげひらはどのようなことを言っているか。わかりやすく書け。

[]

問四——線④「また越ゆべしともおぼえねば」の口語訳として最も適切なものを次から選べ。

ア 再び越えるつもりにもなれないので

イ 再び越えることができると思われないので

ウ 再び越えなければならぬと思うので

エ 再び越えることができないと思われないので

2 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

物まなびするともがら、古言ふることの、しかいふもとの意こころを知らまほしくして、人にもまづ問ふこと常なり。しかいふもとの意とは、たとへば、天あまといふはいかなる意ぞ、地つちといふはいかなる意ぞ、といふ。たぐひなり。これも学びの一つにて、^①さもあるべきことにはあれども、さしあたりて、むねとすべきわざにはあらず。大かたいにしへの言は、しかいふもとの意を知らむよりは、古人の用ひたる意をよくあきらめ知るべきなり。用ひたる意をだによくあきらめなば、しかいふもとの意は、知らでもあるべきなり。そもそも^②よろづのこと、まづその本をよくあきらめて、末をば後にすべきは、論なければ、しかのみにあらず^③、ことことのさまによりては、^④Aよりまづものして、後に^⑤Bへはさかのほるべきもあるぞかし。大かた言のものと意は知りたきわざにて、われ考へえたりと思ふも、^⑥あたりやあらずや、定めがたく、多くはあたりがたきわざなり。されば^⑦ことことのはの学問は、そのもとの意を知ることことをばのどめおきて、^⑧かへすがへすも、^⑨C意を、心をつけてよくあきらむべきわざなり。たとひそのもとの意はよくあきらめたらむにても、いかなるところにつかひたりといふ^⑩ことを知らずは、何のかひもなく、おのが歌文に用ふるにも、ひがごとことのあるなり。今の世、古学をするともがらなど、ことに、すこし速き^⑪ことといへば、まづ^⑫D意を知らむとのみして、用ひたる意をば考へむともせざる故に、おのがつかふに^⑬いみじき^⑭Eのみ多きぞかし。

*ともがら＝仲間たち。 *もとの意＝語源（語原）。
*あきらめ＝明らかにして。 *のどめおきて＝延ばしておいて。
*ひがごと＝見当違い。

問一 線⑦～⑫の語の文章中での意味を、次から一つずつ選べ。

- | | | | | | |
|---|--------|---|--------|---|---------|
| ア | 比較 | イ | 違い | ウ | 意味合い |
| エ | 種類 | オ | 両面 | | |
| カ | 意味 | キ | 趣き | ク | 主なこと |
| ケ | 学問 | コ | 目標 | | |
| ク | あらゆること | ケ | 世間の出来事 | コ | たぐさんの言葉 |

- 工 知らないこと オ 調べたいこと
ア 何としても イ 一通り ウ 残念ながら
エ 念入りに オ とりあえず

問二 線①「さもあるべきこと」、②「あたりやあらずや」をそれぞれ口語訳せよ。

① _____
② _____

問三 線⑬～⑭の「こと」は、漢字にすると、「言」、「事」のいずれかになる。「言」にあたるものを二つ選び、記号で答えよ。

() ()

問四 A～Eには、すべて文章中に使われている言葉が入る。A・Bはそれぞれ漢字一字、C・Dはそれぞれ七字、Eはひらがなだけの単語を文章中から抜き出して書け。

A B
C
D E

問五 この文章で、筆者が主張していることを次のようにまとめるとき、 (1)・(2)にあてはまる言葉を、それぞれ指定された字数の現代語で書け。

「古言」(古い言葉)を研究するには、ともすれば(1) (五字)する傾向があるが、それを第一の研究目的とすべきではなく、(2) (十五字以内)することがいちばん大切である。

(1)
(2)

3 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

すべて世の中の^⑦ありにくく、我が身と栖^{すま}との、はかなく、あだなるさま、またかくのごとし。いはむや、所により、身の程にしたがひつつ、心をなやますことは、あげて数ふべからず。

もし、おのれが身、^①数ならずして、^⑧権門のかたはらに居るものは、深くよろこぶことあれども、大きにたのしむに能はず。なげき切るときも、声をあげて泣くことなし。進退^{しんたい}やすからず、起居^{たぢる}につけて、恐れをのくさま、たとへば、^①雀の鷹の巢^{たか}に近づけるがごとし。もし、貧しくして、富める家のとなりに居るものは、朝夕すばき姿を恥ぢて、へつらひつつ出で入る。妻子・僮僕^{*どうぼく}の羨^{あやむ}めるさまを見るにも、^②福家の^②人ないがしろなるけしきを聞くにも、心念^{*しんねん}々に動きて、時として安からず。

もし、せばき地に居れば、近く炎上ある時、その災^{わざひ}を逃るることなし。もし、辺地^{へんち}にあれば、^{*わうへん}往反^{*わうへん}わづらひ多く、盗賊^{たうそく}の難^{がた}はなはだし。また、^③いきほひあるものは貪欲^{どんよく}ふかく、ひとり身なるものは人にかろめらる。財あればおそれ多く、貧しければうらみ切なり。人を頼めば、身、他の有なり。人をはぐくめば、心、恩愛^{おんあい}につかはる。世にしたがへば、身くるし。したがはねば、^④狂せるに似たり。いづれの所を占めて、いかなるわざをしてか、しばしもこの身を宿し、^{*たまゆら}たまゆらも心を休むべき。

- *権門＝権勢のある人の家。 *すばき姿＝みすばらしい姿。
- *僮僕＝召使いの少年。 *念々に＝瞬時に。
- *往反＝ここでは、京都への往復。 *たまゆら＝わずかの間。

問一 —— 線⑦「ありにくく」、①「数ならずして」、⑧「かろめらる」の文

章中での意味として、最も適切なものを次からそれぞれ選べ。

- ⑦ ア ありがたく イ 手に入れにくく
- ウ 存在しにくく エ 暮らしにくく
- ① ア とるに足りない人物で イ 数えることができないで
- ウ 人数が不足していて エ 財産ははかり知れなくて
- ⑧ ア 身軽に思われる イ ばかにされる

ウ とらわれる エ からまれる

問二 —— 線①「雀の鷹の巢に近づけるがごとし」について、次の問いに答えよ。

(1) 「雀の鷹の巢に近づけるがごとし」とは、どのようなことをたとえているか。最も適切なものを次から選べ。

- ア 危険に満ちた様子
- イ 自らわなにかかる様子
- ウ 気がねしてびくつく様子
- エ 工事が簡単である様子

(2) 「鷹」は、何をたとえたものか。文章中から抜き出して書け。

問三 —— 線②「福家」と同じ意味で用いられている言葉を、文章中から抜き出して書け。

問四 —— 線③「いきほひ」を現代かなづかいに直し、すべてカタカナで書け。

問五 —— 線④「狂せるに似たり」と対比されている部分を、文章中から抜き出して書け。

問六 この文章の内容と異なるものを次から二つ選べ。

- ア この世では、生活環境や境遇によって心労が多い。
- イ 金持ちもそうでない者も、それぞれ心労はたえない。
- ウ 権勢のある者は欲望にとらわれにくい。
- エ 権勢のある人の隣に住む庶民は気楽だ。
- オ 人の世話をすると恩情が生じて自由がなくなる。

4 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

* 除目に司得ぬ人の家。今年はかならずと聞きて、はやうありし者どものかほかなりつる、田舎だちたる所に住むものどもなど、みなあつまりきて、出で入る車の轆もひまなく見え、物まうでする供に、我も我もとまるりつかうまつり、ものくひ、酒のみ、ののしりあへるに、はつる暁まで門たたく音もせず、あやしうなど耳立ててきけば、前駆おふこゑごゑなどして、上達部などみな出で給ひぬ。ものききに、宵よりさむがりわななきをりける下衆男、いと物うげにあゆみくるを、見る者どもはえ問ひにだにも問はず。外よりきたる者などぞ、「殿はなににかならせ給ひたる」などとふに、いらへには、「なにの前司にこそは」などぞかならずいらふる。まことにたのみけるものは、いとなげかしとおもへり。つとめてになりて、ひまなくをりつる者ども、ひとりふたりすべりいでて往ぬ。ふるき者どもの、さもえ行き離るまじきは、来年の国々、手を折りてうちかぞへなどして、ゆるぎありきたるも、いとほしうすさまじげなり。

〔枕草子〕より

* 除目 役人を任命する行事。ここでは、国司などの地方官任命の行事である。「県召しの除目」。審議は夜中におこなわれていた。

* 司 官職。

* はやうありし者ども ほかほかなりつる、田舎だちたる所に住むものども

≡ 昔仕えていたが、今は、ほかの家に仕えている人たちや、都に住んでいない人たち。

* 轆 牛車の前に突き出した二本の棒。

* ひま すすきま。

* 物まうで ここでは、任官がかなうように神社などに詣でること。

* 前駆おふ 高貴な身分の人が通る時に、道をあけさせること。

* 上達部 高位の官職にある貴族。

* 出で ここでは、宮中から退出してくること。

* 下衆男 召し使いの男。 * 外よりきたる者 事情を知らない人。

* たのみける 期待していた。 * つとめて 朝方。

問一 線①「ののしりあへる」の意味として適切なものを次から選べ。

- ア けんかをしている
- イ 悪口を言い合っている
- ウ お祝いをしている
- エ 大声でさわいでいる

問二 線②「いと物うげにあゆみくる」とあるが、その理由を、「官職」期待の二語を使って、三十字以内で書け。

問三 線③「なにの前司にこそは」などぞかならずいらふる」について、次の問いに答えよ。

(1) 「いらふる」に対応する主語を、文章中から抜き出して書け。

「 _____ 」

(2) 「前司」とは「前の国司」という意味であるが、「なにの前司にこそは」と答える心情として最も適切なものを次から選べ。

- ア もう一度国司を務めたいという希望を表す気持ち。
- イ 新たな国司でないことを残念に思う気持ち。
- ウ 国司を務めた経歴をもつことを謙遜する気持ち。
- エ 前の国司であることを誇りに思う気持ち。

問四 線④「え行き離るまじき」について、次の問いに答えよ。

- (1) 「え行き離るまじき」の意味として最も適切なものを次から選べ。
 - ア その家から離れたくない
 - イ その家から離れるべきではない
 - ウ その家から離れられない
 - エ その家から離れてはいけない
- (2) 「え行き離るまじき」の後に省略されている言葉を、文章中から三文字で抜き出して書け。

問五 この文章の主題を次のようにまとめるとき、
な言葉を文章中から四字で抜き出して書け。

_____ にあてはまる適切な
_____ きのもの

第3講座 古文の基礎知識・入試によく出る問題

○古文の基礎知識

- 1 (1) 陰暦八月十五日 (2) 私が長年連れ添ってきた妻です
(3) 陰暦五月の末 (4) 過去を思うのは

【解説】

(1)・(3) 「葉月」は陰暦八月、「皐月」は陰暦五月のこと。「つごもり」は「月の末日」または「月の終わりがら」のこと。一年の終わり・大みそかのことを「大つごもり」という。

(2) 「年ごろ」は「年来の」「長年の」の意味。現代語とはまったく意味が異なる。

(4) 「来し方」は過去のこと。

- 2 (1) 東の方角の空 (2) 午後四時ごろであろうか

(3) 午後八時ごろ、都の南東の方から火事が起こって、北西の方にまで燃え広がった

【解説】

(1) 「卯のかた」とあるので、方向で東。

(2) 「申の刻」は午後四時、「ばかりにや」は「……ころであっただろうか」の意。

(3) 「辰巳」は「巽」のこと、「戌亥」は「乾」のこと。

○入試によく出る問題

- 1 二つ三つばかりなるちごの(の)

【解説】

直前の行の「ちごの」の「の」が主格を表すことに注目する。

【口語訳】

かわいらしいもの。瓜にかいた赤ん坊の顔。雀の子が、(チューチューと)鼠の鳴きまねをすると、(ピョンピョンと)おどりながらやって来るの。一、二歳くらいの幼児が急いで這って来る途中に、ほんとうに小さい塵があったのを目ざとく見つけて、とてもかわい

らしい(小さい)指でつまんで、大人に見せている姿は、とてもかわいらしい。

- 2 (1) すじ (2) つめぎはに案じて指せ

【解説】

(2) 終わりに「と」を入れないように注意する。

【口語訳】

私の母は、何とかいう名人の弟子であって、将棋がとても強い。母が言ったことには、「勝負の最後の段階になってあれこれ考えるのは、初心者の段階である。(だから)初めのうちから、詰めの段階を考えて将棋を指せ。」と(言っていた)。囲碁を打つ時にも、まだ上手でない者は、みっともない手を打つものである。基本的な打ち方に従うことが碁の道理なのである。普通には、(みっともない手を)打ったあとで、(未熟な者は)人に笑われることが多いものである。

- 3 (1) 一日中 (2) 子(鶏の子)

【解説】

(1) 一日中を「ひねもす」というのに対して、「一晚中」を「よもすがら」という。

【口語訳】

また、鶏が卵を温めている様子は、だれでも見ることであろう。鶏は、羽毛が、胸と卵をへだてているのを満足できなく思うのか、自分で自分の胸の羽毛をくいむしって、卵を(直接)肌につけて、一日中これを温める。

■確認テスト

- 1 問一 午後六時 問二 おりふし 問三 ゆりすえただよえ

問四 あふぎ

【解説】

問四 現代かなづかいを歴史的かなづかいに直す問題。

【口語訳】

ころは二月十八日の午後六時ごろのことだったが、折から、北風が激しく吹き、磯に打ち上げる波も高かった。舟は(波に)ゆり

上げられ、ゆり動かされ、ただよっていたので、扇も支柱に固定せずにはひらめいていた。

2 問一 ア 問二 ウ 問三 この庭のくくり給へ

解説 問二 「そうすべきでない」「そうではないほうがよい」の意。

問三 引用の「と」に注目。

口語訳 陰陽師有宗入道が、鎌倉から上京してきて、(私を)探してやってきたが、まず(門から)入って、「この庭がむだに広いことは、驚きあきれたことで、よろしくないことだ。道理を心得ている者は(何かを)植えることに努力するものだ。(人の通る)細い道の一つ残して、全部畑になさいませ」と忠告しました。

なるほど、少しの土地でもむだに(遊ばせて)おくことは、無益なことだ。食物・薬の材料となる植物などを植えておかなければならない。

3 問一 エ 問二 ア

解説 問二 「物」とは子猿こざるのことである。「ある男」は木の下にいる

ので、子猿を木のまたに置くことはできない。

口語訳 ある男が、いつも猿を矢で射ていた。ある日山を歩いていると、大猿がいたので、木の上に追いあげて矢を射たところ、ねらいを外さず(大猿を)射とめた。(大猿は)まさに木から落ちようとしたが、いったいなんであろうか、物を木のまたに置くようにするのを見ると、(それは)子猿であった。(大猿は)自分が傷を負って地面に落ちそうなので、おぼついていた子猿を助けようとして、木のまたに置くこととしていたのであった。

4 問一 この前裁り切りて来 問二 エ 問三 ウ

解説 問一 「どこまかに教へてやりつ」とあるように、教えてやつ

た内容が、引用の助詞「と」以前に書かれている。

問二 「このかり琴柱参らせ候はん」と言つて持つてきた人物がだれだったかを読み取る。この話の出来事を中心である。

問三 女房たちは、自分の低い宿直人が琴柱の形状を知らないものと、勝手に思いこんでいたが、宿直人はそれを知っていたのである。女房たちは、そのことに驚いて、「こまごまと教へ」た自分を恥じ合つたのである。

口語訳 あるところで、女官たちがおおぜいで箏そうを弾いていたところ、琴柱がはじけ飛んでなくなつたのだが、適当な人もいなかったのだ、宿直人が見えたのを呼んで、「この前裁ぜんざいの中にある、楓かほの木のもまたになつたこれくらいの大きさのを、このように切つて来なさい」とこまごまと教えて(切り取らせに)やつた。「たいした期待も持てまい」と話しているうちに、切つて持つてきた。簾まなの近くに寄つて、「この仮の琴柱を差し上げましょう」と言つたので、思わず驚きあきれ、「こまごまと教えたけれど、どんなにばかげたことだと思つたことだろう」と、皆、恥ずかしく思つたのだつた。

5 問一 今日なんくらせまし 問二 こそ

問三 黄の粉まぶしたる餅

解説 問一 主人の言つた言葉の範囲である。終わりは「とて」の前までである。

問二 続く内容が「よき幸ひなれ」であることに注目する。普通の表現では「よき幸ひなり」となる。已然形で結んでいるので、係り結びの法則によって係助詞「こそ」が入る。

問三 直前に「いと固かりければ」とあることに注目する。後にも「あぶりてこそものせめ」とある。

口語訳

「なんだらう。」と入れ物のふたを取って見ると、きな粉をまぶした餅である。主人は喜んで、「今日はごちそうもなくもの足りなく思っていたが、餅が手に入ったことは、まことに都合のよいことである。それではこの餅を人々に差し上げよう。」と言って、ただちに箸を取り出して、(餅を)取り出そうとしたところ、たいへんに固かったので、「これは日がたっているものだと思われる。(火で)あぶって食べよう。」

第4講座 物語①

1 問一 夜どおし 問二 イ 問三 草木 問四 エ

解説

問一 「夜どおし」を「よもすがら」と言うのに対して、「一日中」を「ひねもす」と言う。対義語として覚えておくとうよい。

問二 文脈から考える。昨日まで青々と茂っていた木が今日にはもう枯れてしまったのである。「急に」という意味の言葉が入る。

問三 田真が紫荊樹の枯れた様子を見て言ったことを押さえる。

問四 兄弟はなぜ夜どおし話し合ったのかを押さえ、また、「草木心ありて……わきまへざるべしや」の会話の内容をしっかりと理解する。

口語訳

田真、田広、田慶の三人は兄弟である。親が死んでしまったあと、財産を三つに分け合ったのであるが、庭に紫荊樹といって、枝葉がりっぱで、花も咲き乱れていた木が一本あった。この木をも三つに分けようと夜どおし三人で相談したが、夜がすでに明けたので、木を切ろうとして、木のもとへ行くと、昨日までりっぱに茂っていた木が、急に枯れてしまった。田真がこれを見て、「草木にも心があつて、切つて分けようと話しているのを聞いて枯れてしまったのだ。本当に、人間として、この木の心をわからないでよいだろうか(いや、わかるべきだ。)」と言って、分けないで(そのままにして)おいたところ、再びもとのように元気になったということである。

2 問一 a イ b ア c オ 問二 エ 問三 万一もちに

問四 ウ 問五 イ 問六 小利口なゆえの慢心は、災いを招く

もとになること。(二十四字)

解説

問一 a 「汝ら」とは何か。 b 前の段落にある「ぶらさがり

居れば」の主語と同じ。

問二 南天の実を食べても亭主が気づかないことをからかっている。

問三 ひよどりが述べている部分から抜き出す。

問四 口語訳参照。

問五 「や」は反語。反語の訳し方に注意する。

問六 「ひよどり」を例にとつて、慢心を戒めているのである。

口語訳

ひよどりが小鳥たちを集めて言うには「お前たちは畑の作物をつつき、または庭の木の実を食べる時に、いろいろな高い声をだして、友を呼んでさわぐので、人は小鳥が集まってくるのを知って、網をはったりとりもちを置いたりするのである。わたしは、冬になって山に食べ物がないときは、人家に来て、庭にある南天の実を食べるけれども、(その家の)亭主は気がつかない。あまりにおかしいので、飛び立ちぎわに大きな声で礼を言って帰るくらいである。万一とりもちにかかったとしても、少しもさわがず、体をすくめて、そつと仰向けになって、ぶらさがつていれば、「はこ」は上に残り、体だけが下に落ちる時、そそくさと飛んで(逃げて)行けばよいのだ。お前たちは、とりもちにかかった時、あわてふためいてばたばたするから、全身にとりもちをぬりつけて、動くことができなくなつてつかまつてしまうのは、(まったく)工夫がないことこの上ない」と、いかにも知恵者のように語つた。

末席からみそさざいという小鳥が、笑つて言うには「人は鳥よりかしくくて、一度(ひよどり殿がやったような)手を見た者は、(今度は)下にも細い『はこ』を置き、例のようにぶらさがつて下へ落ちると、下にある『はこ』を背中につけ、思いもよらないことなので、さすがのひよどり殿も、あわてさわぎなさり、全身にとりもちをぬ

3

りつけてつかまつてしまうのは(小鳥と)同じことである。世間のこざかしい人は、皆、このひよどりと同じである。自分の知恵を使つて、ひとたび成し遂げたことがあると、自慢して、いつもこのように(成し遂げられるのだ)と思つてしまう。天下の人は皆愚かだろ(か)いや、愚かであるはずがない。人は相手のうまいやり方を知つて、さらにその上の手を打つため、今までうまくやったことが、皆むだになり、(そのような悪賢さが)かえつて仇となつて、わざわいをまねくことを世間のこざかしい人は知らないのである。」

問一 エ 問二 亭主が下男の一文分の酢を売らなかつた行為に對して。(二十五字) 問三 ウ 問四 銭 問五 イ

解説 問二・問五 わずかな額だからと、一文分の商売を大切にしようとしなかつた下男の態度をいましめ、一文の大切さを教えるために、亭主は何もない地面を掘らせたのである。

口語訳

ある時、夜ふけに樋口屋の門をたたいて酢を買いにくる人があった。中戸を隔ててではあるが、(主人のいる)奥の部屋には、(その様子)が)かすかに聞こえた。下男が目覚まし、「どれほどですか。」と聞く。「ごめんどうでしょうが一文分を。」と答える。(たったの一文だけだったので下男は)寝たふりをして、そのあと返事もしないでいると、(客は)しかたなく帰つていった。夜が明けて、主人はこの下男を呼びつけて、何の用もないのに、「門口を三尺掘れ。」と

言う。主人の命令に従つて、下男の久三郎は、もろ肌を脱いで鍬を取り、堅い地面を夢中になって、汗びっしょりになりながらやつのこと掘った。その深さが三尺になったとき、(主人が)「銭があるはずだが、まだ出てこないか。」と言う。「小石や貝殻のほか何も

見えません。」と(下男が)返事をする。(すると主人は次のように言った。「そんなに苦勞をしても、錢が一文も得られないということをよく心得て、今度は一文の商売も大事にしなさい。」)

4 問一 エ 問二 ウ 問三 老姥

問四 権九郎の打つ鼓の音も父親新九郎と同じように茶釜に響くようになつてきたから。(三十七字)

〔解説〕 問一「心に落つ」は、ここでは「納得する」「満足する」の意味。

問三 長い年月、小鼓の音を聞き慣れているのはだれか。

問四 老姥の言葉に着目して、新九郎と権九郎の小鼓の音の共通した点を答えればよい。

口語訳

(新九郎が)権九郎という名前のころ、毎日小鼓の稽古に精を出していたが、まだ自分に納得ができるような音が出せないでいる時、長い間権九郎に仕えていた老姥が、毎朝お茶などを持ってきて権九郎の給仕などをしていたが、ある時(この老姥が)主人(権九郎)の小鼓もひじょうに上達したことを申し上げたので、権九郎も奇妙なことと思つて、いつも小鼓の音を聞いているが上達したとは思えない。自分の役目である小鼓の上達がわかる理由を尋ねて笑つたところ、老姥が答えて言うには、「私はあなたの親の新九郎様の小鼓を数年間聞いて、音がするたびに毎朝煎じていた茶釜に響いていたのです。これまで権九郎様の小鼓はそういうことがなかったのですが、最近四、五日は小鼓の音がするたびに茶釜に響いたので、そのことから上達しているとわかつたのです。」と答えた。長い間聞き慣れているので、おのずから微妙な(小鼓の)音の良し悪しもわかるのだと権九郎は感心したのである。

5 問一 袂ぞいたくぬれまざる

問二 おわせぬ

問三 子どもがいたらどんなに心苦しいだろう。 問四 イ

〔解説〕 問一「いたく」は「はなはだしく」の意味。とめどなく涙がこぼれ落ちるので、袂がぐっしり濡れるのである。

問三 直前の部分で重衡がなぜ子どもがなくてよかつたと思つているのかを述べている部分を答える。

口語訳

都を出て日数もたつたので、三月も半ば過ぎて、春もまさに終わろうとしている。遠くの山の桜の花は消え残つた雪かと思われのように白く見えて、多くの海辺や島が一面に霞んで、(重衡殿は)過ぎ去つた昔のことやこれから先のことをいろいろ思い続けなされるにつれて、「こんな悲しい旅をする身になつたが、これはいったいどういう前世の報いによるつらさなのだろう。」とおっしゃられて、ただ涙がとめどなく流れるのである。

(重衡殿には)お子様が一人もなかつたことを、母の二位殿も嘆き、奥方の大納言典侍殿も残念なことだとして、多くの神仏に(子どもが授かるように)お祈り申し上げなされるけれども、その効き目もないことであつた。(しかし、今となつてみると)「(子どもが)なくてよかつた。(もし)子どもでもあつたならば、どんなに悲しい思いをしているであろう。」と(重衡殿が)おっしゃつたのは、せめてものなぐさめであつた。

小夜の中山にさしかかつた時にも、再び(この坂を)越えて都に帰ることができるとも思われないので、ひとしお悲しみの度合いが増して、袂はよけい涙で濡れるのであつた。

ませんが)、異名がご置います。ただ、(私を)見る人は(私のことを)『貧報の冠者』と言っておりませう」と言ったのを見たところで夢から覚めたので、(僧はこの夢によって)自分の不運な前世からの因縁を知って、「どこに行っても、この若者がいつもそばから離れずにいるのでは(貧乏な生活のままであろう)」と思つて、外に向けた心を改めて(旅に出るのをやめて)、みすばらしいままで、元の寺に住んだのであつた。

このようなことは、ほかの者にもあることではあるが、一人ひとりの人(の多く)は夢にも見ないので、前世からの因縁を知らない。(そのため)そんなに長くもない人生の時間を、もったいなくも、空いている時間に後世のための仏道修行をさしおいて、先に、(この世で別の生き方をしたら)もしかしたら、もしかしたらと(もつとい生活や、もつと豊かな生活を探して)走り求めている、(そのことに)心を尽くしているのであらう。(しかし、このようなことは)仏様の目からご覧になれば、とても恥ずかしい生き方でございますよ。

第10講座 随筆②

1 問一 エ 問二 (1) あやしゅう (2) ウ

問三 イ 問四 ア

問五 馬を貸してくれたことのお礼。

【解説】 問一 作者ははるか遠くの村をめざしている。さらに、この那須野は道が縦横に分かれていてわかりづらいのである。

問二 (2)草刈る男が「情け知らぬにはあらず」人で、「(馬を)貸し」てくれたことから判断できる。

問三 女の子の名の「かさね」を「重ね」の意味にとつて、ただの撫子でなく花びらの重なつた八重撫子にたとえている。

問四 「やがて」のような古今異義語には要注意。

問五 「価」は、「値段、代金」の意味。何に対しての代金であるかを考える。

【口語訳】 那須の黒羽という所に知り合いがいるので、ここ(日光から野原を横切つて、まっすぐに近道を行こうとした。はるか遠くに村を目指して行くうちに、雨が降りだし、日も暮れてしまった。(そこで)農夫の家に一夜の宿をかりて、夜があけると、また野原の中を歩き続けた。(すると)放し飼いの馬がいた。草を刈っている男に、野道の苦しさを訴えて、頼みこむと、田舎の荒くれ男でも、さすがに人情を知らないわけではなく、「どうするのがよいかなあ。(わたしは、あなたがたを乗せて馬を引いていくわけにはいかないが)」だがこの那須野は、道が縦横に分かれ、入りくんでいて、土地の様子に慣れない旅の人が道をまちがえるのが、心配ですから、「この馬に乗って行って」この馬が止まつたら、追いついてください。」と言つ

て貸してくれた。この男の子どもが二人、馬のあとについて走ってくる。一人は少女で、名を聞くと「かさね」と言う。聞き慣れない名が優雅に感じられたので、(曾良が次の句を詠んだ。)

この子は珍しく「かさね」という名である。子どもをよよく撫子にたとえるが、撫子とすれば「かさね」とは、花卉の重なった八重撫子であろう。

まもなく人里に着いたので、謝礼を鞍つばに結び付けて馬を返した。

2

問一 ㊦ エ ① ウ ㊧ ア ㊨ エ

問二 ① 当然そうあるはずのこと ② 当たっているかないか

問三 ㊩ ・ ㊪

問四 A 末 B 本 C 古人の用ひたる D しかいふもとの

E ひがごと

問五 (1) 語源を研究 (2) 古代の人々の使用法の研究を(十三字)

【解説】 問二 ① 「さもあり」は、「いかにもそのとおりである・もつともである」の意味。

問四 文意を正確に読み取ることが大切。かぎになる言葉にも注意する。

問五 作者は、「もとの意」と「古人の用ひたる意」のどちらを重要と考えているか。

【口語訳】 学問をする仲間たちが、古い言葉の語源(本来の意味)を知りたいと思つて、人にもまず語源を尋ねることが(世の)常のことである。

たとえば、「天」とはどんな意味なのか、「地」とはどんな意味なのか、という種類のものである。これも学問の一つで、当然そうあるはずのことだが、さしあたりおもだったことではない。だいたい

古代の言葉は、語源を知ろうとするよりは、古代の人々が用いている意味さえ明らかにした上で知るべきである。用いている意味を十分明らかにすれば、語源は知らなくてもよい。そもそも、あらゆることについて、まず、その本意を十分に明らかにして、末を後にするべきだというのは、(一つの)論ではあるが必ずしもそうばかりではなくて、事によつては、末を先に明らかにして、その後で本来の意味にもどるべきである。だいたい語源はわかりづらく、自分判断できたと思つても、当たっているのか、当たっていないのか、決めることが難しく、多くは当たっていない。そういうわけで、言葉の学問は、語源を知ることが延ばしておいて、念入りに、古代の人々が用いた意味を、注意しながら十分に明らかにすべきである。たとえ、語源を十分に明らかにしたとしても、(その言葉を)どのようなところに用いたかということを知らないのでは、何の意味もなく、自分の歌や文に用いるにも、見当違いが生じるものである。現在、

古学を研究する仲間たちなど、特に少し昔の言葉といえは語源を知ろうとばかりして、用いている意味を考えようとしなから、自分を使うと、たいへん見当違いだけが多いのである。

3

問一 ㊦ エ ① ア ㊧ イ 問二 (1) ウ (2) 権門

問三 富める家 問四 イキオイ 問五 身くるし

問六 ウ・エ

【解説】 問二 —— 線①は、「恐れをののく」様子をたとえている。(2) 「恐れをののく」のは「権門のかたはらに居るもの」で、これを「雀」にたとえている。

問三 「福家」とは、「裕福な家」の意味である。

問五 「方丈記」は、対句表現に特色がある。ここでは「世にした

がへば、身くるし」と「世に）したがはねば、狂せるに似たり」が対になっている。

問六 「いきほひあるものは貪欲ふかく」とある。また、そうした人のそばに居るのは「恐れをのく」ばかりなのである。

口語訳 だいたい人の世は暮らしくく、自分の身と住んでいる家の頼りにならずむなしげな様子は、以上に述べたとおりである。まして、環境により、身分にしたがって心をなやますことは数えることができないほどである。

仮に、自分が取るに足りない人物で権力者の隣に住んでいけると、非常にうれしいことがあっても、思いきり楽しむことができなない。(また)悲しみが切実なときも、声をあげて泣くこともできない。行動すべてに遠慮し、身のふり方、動作の一つひとつにまで恐れびくびくしているありさまは、たとえれば雀が鷹の巢のそばに居るようなものだ。また仮に自分が貧乏で、裕福な家の隣に住んだとすると、朝に晩に、みすばらしい(自分の)姿が恥ずかしく、自分の家の出入りにも隣の家の人に気を使うようになる。妻や子どもや召し使いの少年などが、隣の家をうらやましがら様子を見たり、また、その裕福な家の人が、自分の家を軽んじている態度が耳に入ってきたりするにつけても、そのたびに気持ちが動揺して、いつときとして安らかな気持ちではいられない。

仮に家の密集している地域に住んだとすれば、近くに火災があったときに、類焼をまぬがれない。また仮に(逆に)辺鄙な所に住んだとすれば、都への行き帰りが厄介だし、強盗が多くて危険が多い。また、そうかといって、権力のある人(に頼ると、そういう人)は欲が深いし、(と)いって、だれにもつながりをもたないと、軽く見られ

ばかにされる。財産があれば心配が多いし、貧乏でいれば人をうらやむ気持ちが強い。人を頼みにすれば、その人のいいなりになってしまう。他人の世話をすると、(今度は)自分の心が、その人を愛することに使われて、振りまわされてしまう。世間の常識にしたがって生きようとすれば、自分が窮屈になる。従わなければ狂人のように見られる。(いったい)どんな環境に座を占めて、どんなことをして暮らしたら、しばらくでもこの身を安住させ、わずかの間でもこの心をやすらかにさせてやることのできるのだろうか。

4 問一 工

問二 主人が新たに官職に任命されるという期待が外れてしまったから。(三十字)

問三 (1) 下衆男 (2) イ 問四 (1) ウ (2) 者ども

問五 すさまじ(きもの)

解説 問二 「ものうし」は、「心が重い・おつくうだ」という意味。

心が重いのは、一晚、寒さにふるえながら、主人が新たな官職に任命されるという発表を待っていたが、結局、何の官職にも就けなかったからである。

問三 (2) 主人が新たに官職(国司)に任命されなかったことと、下衆男が「物うげ」にしていることから考える。

問四 (1) 「え……否定語」で「……できない(不可能)」の意味を表す。(2) 「ふるき者ども」で「離れることができない(人々)」という意味である。

問五 「枕草子」の中の、「すさまじきもの」の段である。「すさまじ」は、「興ざめである・さびしい」という意味。官職に就けるのはという期待にわく前半と、期待外れに終わった後半を対比させ、

期待外れに終わった家の様子を「すさまじ」と表現している。

口語訳

官職を任命する行事が行われる日に、官職に就けなかった人の家(は、さびしく、興ざめなものである)。今年こそはかならず(官職に任命されるだろうなど)と聞いて、昔仕えていたが、今は、ほかの家に仕えている人たちが、都に住んでいない人たちなど、(少しでもその家に関係のある人たちが)みんな集まってきて、出入りをする牛車(ぎゅうしゃ)の轆(ひき)もすきまなく見え、(主人が今年こそは官職につけますようにと、神社仏閣などに)参詣(まげ)するお供に、わたしもわたしも付きしたがって行き、(屋敷の中では)物を食べたり、酒を飲んだりして、(お祝い気分で)大声で騒いでいるのに、明け方になるまで(主人を呼び出しに来る使者が)門をたたく音もしないので、どうしたことだろうなどと思つて(屋敷の外の様子を)耳を立てて聞いていると、高貴な身分の人が通る時に、道をあげさせるためのかけ声などがして、高位の官職にある貴族などが、みな宮中から出てきてしまわれた。情報を聞きに、前夜のうちから、寒がりふるえながら(宮中のそばに行つて)いた召し使いの男が、とても心が重くおっくうそうに歩いて来るのを、(その姿を)見る人たちは(結果を)聞こうにも聞けない。事情を知らない人などが、「御主人は、どの官職に就かれましたか」などと聞くと、それに答えるのに、「どここの国の前の国司に」などと必ず答える。心から期待していた者は、とても情けなく悲しく思うのである。(行事の日の)翌朝になって、所在なくしている人たちが、一人、二人と(少しずつ)そと(屋敷から)出て去っていく。昔からその家に仕えている人たちで、どこにも行くことができない人たちは、来年(国司の座が空く)国々を、指を折つて数えたりなどして、歩き回っているのも、とてもさびしく、興ざめな様子である。

第11講座 総合問題①

1 問一 ① a いいける ② b ようなり

問二 心ざしのまさらむにこそはあはめ

問三 二人の男の身分や愛情などがまったく同じようで、どちらが優れているとも言い難かつたから。

問四 ア 問五 菟原(と)茅淳 問六 津の国にすむ女

問七 (1) どちらの男と結婚するかということ。

(2) 水鳥を射ること。 問八 イ

問九 よばひ人ども 問十 ⑧ エ ⑩ ウ 問十一 掛詞

問十二 女(が)川に飛びこんで自殺(した)こと。

問十三 親子(父子)

問十四 和泉の国の男の親が、和泉から舟で土を運んできたから。

解説 問二 「あふ」が、「結婚する」ことを意味している。

問三 二人の求婚者の、年齢、顔かたち、身分、愛情、行動などのすべてが同じだったのである。

問五 「よばひ人ども」は、一行目の「よばふ男」と同じである。

問六 ここでの「をさなし」は、「未熟である」の意味。女の親が自分の娘を謙遜(けんそん)してこのように言っている。

問七 (1) 女が決められずに迷っていたことは何かを考える。

(2) 次の段落の会話文中にその方法が述べられている。

問十 ⑧ここでの「奉る」は「差し上げる」の意味で、「差し上げる」ものは、自分の娘である。⑩「そのかみ」の「その」が、水鳥を射た結果であることをふまえて考える。

問十二 水鳥を射た結果も優劣をつけがたいので、女は、「思ひわ